

早稲田大学 政治経済学部

国語

満点	70点	目標得点	50点	試験時間	90分	偏差値	国際政経：73
大問数	3 (古漢融合1・現代文2)	小問数	26	政治	74	経済	72
〔解答形式〕	選択式	21/26問	記述式	4/26問	論述式	1/26問	
〔問題難易度〕	C	2/26問	B	10/26問	A	14/26問	

※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す

Topics

- 1… 出題形式は例年と変わらず。現代文二題、古漢融合問題が一題。現代文は、大問二が随筆、大問三が評論文の読解。
- 2… 全体の難易度も例年通り。漢文については、昨年は散文だったが、今年は本学部頻出の漢詩の出題。漢語・仏教語などの知識が問われた。古文・随筆・評論の難易度も例年通り。評論では短い論述問題(五〇〇六〇字)が例年通り出題された。
- 3… 現代文の評論文では一九九〇年発表作品で、最新の評論文とは言えない作品からの出題だった。抽象度の高い哲学的論考であり、慣れていない受験生には難化と感じられたか。

こんな力が求められる！

古漢融合問題について、「融合」とはいえ、ほぼ独立の問題が出題されるのは例年通り。

漢文問題は、基本的な句法理解、書き下し、解釈の力が身に付いていれば難問ではない。本年は単語の意味を問う問題は出題されなかったが、漢文では、基本的な語彙知識は必須。

古文問題は、例年通り、受験生になじみの薄い作品からの出題。内容は、中世文学、擬古物語などが読解できる力があれば、十分に理解できるレベルである。学部としての対策としては、擬古物語、近世文学・軍記物語・芸能論など中古文学以外の古文にも接しておくことが効果的であろう。それら文学の学習の中で、未知の漢語や仏教語などは、素通りせず理解し身につけてゆく心がけが重要である。

現代文・随筆問題については、本年は抵抗なく読解できる内容であったと思われるが、やや古い時代の文章からの出題が続いている。明治・大正などの随筆・評論などに慣れ親しむこと。文語調の文章への抵抗感は払しょくしておく必要がある。過去問の演習が効果的。

現代文・評論問題については、社会科学全般からの幅広い出題が見られる。「文化論・芸術論・言語論・科学論・政治論・哲学的文章」などで、自身の得意なジャンルをつくらないことが重要。日頃から高い問題意識を持って現代文に取り組む姿勢が求められる。

お茶ゼミカリキュラムとの関連であるが、古漢融合問題について「融合」ということにはこだわる必要はない。各科目についての対策で十分である。復習についてはウィークリーテストに備えるのももちろん、授業等で指摘された、一つ一つの知識までも定着させる必要がある。現代文については、幅広い読解経験が求められる。授業で扱う文章は授業後の復習に加え、自身に不得意と感ぜられる分野を集中して復習するプラン作りも有効であろう。

大問別分析

【一】

予想配点	30/70点	時間配分の目安	30/90分		
文章の種類／ジャンル	古漢融合／漢詩 絵巻				
〔出典〕	(漢詩)『短歌行』曹操 (古文)『豊明絵草紙』鎌倉後期・作者未詳				
〔文字数〕	(漢詩) 48字 (古文) 約一六八〇字				
出題形式	選択式9問、記述式3問、論述式0問				
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す				
問一 B	問二 A	問三 B	問四 A	問五 C	問六 B
問七 A	問八 B	問九 A	問十 A	問十一 A	問十二 A

お茶ゼミカリキュラムとの関連
夏期講習「古文読解上級」、冬期講習「難関大古文」、直前特訓「早稲田の国語」

●本大問の特徴・概要

○ 漢文は漢詩からの出題。本学部では漢詩の出題も多く、抵抗感を払しょくしておく必要がある。設問の難易度は本学部としては標準的。例年にはなく「白文に返り点をほどこす問題」が出題された。基本的句法の習得は必須。不安のある場合はスポット授業及び夏期講習の「漢文基礎徹底マスター」は必須。

○ 古文は、文字数は昨年度より七〇〇字以上減少したが、依然として長文である。設問数は一問増。昨年同様、漢語・仏教語の知識が求められた。幅広い時代・ジャンルの古文に接して、古文常識を身につけておくことが肝要。学習の中で、未知の漢語や仏教語などは、素通りせず理解し、身につけてゆく心がけが重要である。

●注目すべき小問

問三 「憂ひは中より来たり」と書き下す。「従」を「より」と返って読むことに注意する。

問五 傍線部「男女の子息両三人」から考える。「両三日」は「二・三日」、「両三度」は「二・三回」の意味であるから、兄弟は二〜三人。本文中「家嫡羽林」が注で「家の跡継ぎ」とあることから「長男」であろうと思われる。本文中「少将」も「家を譲り置きし」から同一人物とわかる。また、本文中「弟の若君」とあることから、男二人、女一人の構成とわかる。

問六 「人の愁へのうち一苦はまづ来たれり」から考える。ここで言う「人の愁へ」とは、仏教における「四苦」(人間の持つ四つの根源的な苦しみ)のことであることに気づく必要がある。四苦の内容は「生・老・病・死」である。直前で「女(主人公の妻)」が「やまふの床に伏したり」とあることから「病」が正解とわかる。

問七 続く「くの命消えなむとす」から考える。「はかない命」がしばしば「露」に例えられるのは古文常識。正解は「朝露」

問八 長男(少将)が主人公のもとを訪ね、弟(弟の若君)の死を知らせる場面が続く部分である。「今にはじめぬ」とは「今にはじまったわけではない(人の世の常である)」という意味であるから。「八苦」の内「愛別離苦」の苦しみであることをおさえる。「八苦」とは「四苦」に愛別離苦・怨憎会苦(おんぞうえく)・求不得苦(ぐふとく)・五陰盛苦(ごおんじょうく)を加えたもの。

【1】

予想配点	20 / 70点	時間配分の目安	25 / 90分
文章の種類／ジャンル	現代文／随筆		
〔出典〕	和辻哲郎『茸狩り』の全文（『和辻哲郎随筆集』岩波文庫所収）		
〔文字数〕	約二五〇〇字		
出題形式	選択式7問、記述式1問、論述式0問		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
問十三 A	問十四 A	問十五 A	問十六 A
問十七 A	問十八 A	問十九 B	問二十 B
お茶ゼミカリキュラムとの関連 6月期、7月期、夏期講習「現代文上級」「現代文標準」			

●本大問の特徴・概要

○ 例年通り、やや古い（明治と昭和初期）随筆からの出題。本年度は和辻哲郎の随想『茸狩り』。幼少期の茸狩りの経験から、人の「価値観」がいかに形成されるのかを考察した文章。後半評論文的な要素が強くなる。「人の価値観は社会経験の中で形成される」という視点は、評論文でも頻出される視点。大学入試現代文の演習を重ねていた受験生には馴染みの深い論点であり、むしろ読みやすかったか。設問の難易度は昨年度よりも易化している。本学部志望者であれば、全問正解も十分可能。

●注目すべき小問

問十五 文整序問題。選択肢として挙げられている文同士の関係から、内容をも予測しつつつ文を並び変える設問。随筆の設問形式としてはユニークな出題だったが、難易度はそれほど高くない。

文整序の問題は、始めから全てを並べようとするのではなく、始めに対や組になる文をおさえるとよい。本問であれば「ホ 初茸はく」↓「ロ ことにく若い初茸はそうである」と「ハ しかし黄茸の前ではく」↓「ニ 黄茸は純粹でく」↓「イ が、白茸になると純粹な上に」がそれぞれ組になる。「ハ しめじ茸に至れば」とあるので「しめじ茸」が最後にくると解る。正解はホ↓ロ↓へ↓ニ↓イ↓ハ。

なお、前段落後半「まず芝生めいた気分のか」以降を見ると、それぞれの茸について言及される順番が「初茸↓黄茸↓白茸↓しめじ茸↓松茸」となっていたこともヒントになった。

問十七 第4段落5文目「では何が茸の価値を子供に知らしめたのであろうか」と問題提起され、その後5文目に「茸の価値を子供に知らしめたのはく社会であった」と結論される。続く「すなわち」から空欄4前文の「く仲間たちであった」までで詳しく内容が説明されて「言い換えれば、4」と戻るので、「社会」がキーワードであることをつかむ。典型的な「主張↓説明↓主張のまとめ」の構造である。正解はハ。

問十九 傍線部説明問題は傍線部の分析が第一歩。傍線部の主旨は「茸の価値はく体験の相続と繰り返しかならぬのであつてく本質というくものではない」ということである。後半部分から選択肢は「ハ本質がく決まっているものではない」か「ニ 本質というものはあり得ない」に絞られる。第5・6段落を通じて筆者は価値が社会体験によって形成されることを強調しているので、正解はハ。二のようには価値観の「地域や時代による」違いといった論点はここでは触れられていない。

【三】

予想配点	20 / 70点	時間配分の目安	35 / 90分
文章の種類／ジャンル	現代文／評論		
〔出典〕	『「中間者」の哲学』「エピローグ〈中間者〉の存在論へ」(岩波書店)の二節		
〔文字数〕	約二八〇〇字		
出題形式	選択式5問、記述式0問、論述式1問		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
問二十一 B	問二十二 C	問二十三 A	問二十四 B 問二十五 B 問二十六 B
お茶ゼミカリキュラムとの関連 存在論についてはOS早大11月期、冬期講習「早大現代文」で扱った			

●本大問の特徴・概要

○ 抽象度が高くやや扱いにくく感じられたか。「決定論的」「未完結性」「自己組織化」など、評論文特有の概念・言葉には日ごろから意識的に慣れる訓練が必要である。第三問では、例年社会科学全般からの幅広い出題が見られる。「文化論・芸術論・言語論・科学論・政治論・哲学的文章」などで、自身の不得意なジャンルをつくらないことが重要。日頃から高い問題意識を持って現代文に取り組む姿勢が求められる。また、各論点について、筆者の立場を簡潔にまとめられる程度の記述力も常に鍛えること。

●注目すべき小問

問二十一 傍線部理由説明の論述問題。傍線部が「〜というよりは、〜といった方がいい」という形であるから、解答は「Xは、前者のようにAではなく、後者のようにBだから」という形でまとめるように。ここで、設問の求める二つのキーワードがA↓「決定論的」B↓「未完結性」であるとわかる。主語Xは男が作っている絵である。

(解答例) 男の絵は、前者のように「決定論的」に完成図が決まっていず、後者のように「未完結性」を持つ断片が組み合わされたものだから。(60字)

問二十二 空欄補充問題。空欄補充問題は、当てはめた感じなどで解答することなく、本文中に解答の根拠を求めることを意識する。

B 第2段落冒頭「われわれの現実においては」未来の図柄だけではな(く)、過去の図柄でさえも決定していない」と述べられ、その説明が続く。第3段落冒頭「したがって」は第2段落の内容をうけるので、「決定論的ではない」「図柄が(あらかじめ)決定していない」といった内容が入る。正解はロ。「予定調和」とは、「神によって」各部分の調和的な関係があらかじめ定められていること」をいう。

C 空欄を含む文「そのとき過去のC性は、現在の決定にかかわる現実性をもつ」が「これは過去の可能性によって現在を批判することである」と対応している。「過去の可能性」に最も近いものを選ぶ。正解は「ホ 不確定(性)」「ロ 非現実(性)」では続く「現実性をもつ」と矛盾する。

問二十五 傍線部説明問題。「中間者」とは11段落冒頭から「他なるもの」とかかわる未完結の断片」としての「われわれ」のあり方を述べている。11段落5文目で「かかわる」という認識形態は「能動的受動的だ」とある。正解はハ。

三編文を指す